

幕末の長州奇兵隊と各藩の農兵

② 奇兵隊の誕生と福岡藩農兵

木屋瀬みちの郷土史料保存会 松尾 良美

前回で述べたように、高杉晋作による長州藩存亡の危機に際して結成した郷土防衛に沸き立った農兵・商人達を結集した奇兵隊の活躍をみた各藩にも、次々と新しい農兵の編成が行った。

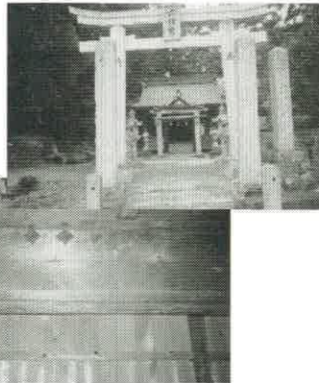
福岡藩に於ても、藩主黒田長溥が兵制を改編して慶応元年には、従来の槍隊・砲隊・銃隊を改めて、槍隊を廃止して西洋式軍隊への転換を計った。しかし福岡藩の家中には、槍隊を廃止して鉄砲を中心とした西洋式軍制への変革に対して、古来からの撃剣・槍術等が衰微する事を嘆き反発する者もいた。その後藩主長溥は、家中の武士二百余名を城内の大書院に集めて洋式を採るも砲隊・銃隊の後列隊に槍隊も置くとして家中の反発する者の暴発を収めた文書が残っている。

さて、慶応四年の木屋瀬宿の「御用給留書」には、鞍手郡内の幾つか触(村内を幾つか区分)ごとに村名・役職・氏名を記し六人から七人を一組として十組が編成されている。原田権蔵組・榎本喜右衛門組・善八組・加藤次郎吉組・彦助組・吉川半次郎

野面村組頭	清十	木屋瀬村	高崎新衛門
全村 組頭	仁三郎	全村	香月孫助
笹田村庄屋	松尾徳兵衛	全村	高崎勘一郎
全村 組頭	西善右衛門	全村	高崎勘十郎
金剛村庄屋	孫蔵	全村	四郎八
全村 組頭	藤九郎	木屋瀬村	貞右衛門

以上のように村々の庄屋や組頭等の役職をの人達で、農兵が編成されたのは、此年代の慶応から明治維新時は、藩の正規兵が関東や東北地方に遠征しているので郷土防衛や藩内の一揆や打ちこわし等を怖れる富裕層の自衛対策でもあったのではなからうか。これより記述する史料は、慶応四年三月(九月から明治元年)福岡藩より早良・志摩・怡土の三郡の村々へ出した

農兵編成の「達」を受けた「石橋家文書」であつて、能古博物館に寄託されたものである。表題には「御達之写農兵」条で、宛先は「早良・志摩・怡土三郡大庄屋中」となっている。「当時勢二付、現代では」の農兵御取登之御趣意、農兵の編成の理由は「委細相違置候処、(委し)事は書面にて通知の事」別紙ヶ条書を以申出候条、文面の四ヶ条で指示する。則夫々付紙を以差図二および候(文書中の大切な事柄を説明)尚左之廉々の相違候間(四ヶ条の指示事項)可得其意候事(内容を了承する)一、農兵之者江は、平日(日頃より)脇差帯候(事)帯刀(指免候事)許す二、稽古場雑用等(訓練については)役場ヨリ仕渡候事(役所より連絡)三、農時を不欠儀は、(農作業に支障がある事は)申迄も無え(云うまでもなく)肝要之事二付(大切な事)右之辺厚勘弁(農時期の訓練実施を許して呉れ)専二可申合候事(充分に両者で協議する)四、農兵之者(農兵は)不風俗威勝之振廻等、(身勝手な振廻や身なり)曾而無之様、(全然ない)村役并頭取之者より(役人や農兵隊の指揮者)重量相論候様有之



侯(必ず十分に注意する様に)万一右之儀於有之は、(もし違反者があれば)其ものは不申及(違反者は勿論)村役頭取之者江も(役人達も)屹度屹度申付候事(役人・頭取も必ず罰する)以上のように農兵隊を編成したが、装備を急速に洋式にするには藩の財政は困難である。その為に洋銃を才覚(本人の財力)で購入する場合は「勝手次第」としている。また、和銃(火縄で火を導火線につけ弾丸を発射する銃)の貸与も充分でなく、農民の採用も生活に障りがない者を選抜した。旧式の火縄銃でなく、洋銃の貸与の為に使用料も村々からの年賦払となつて、装備は富裕な農民や商人からの

挿絵として掲載している農兵が射撃訓練した的の絵馬が飯塚市外(旧大分村)の六所宮なる神社に社額として奉納してある事を木屋瀬で古文書を指導されている郷土史家国友千昭氏から教えて戴き、今春に自家用車で案内してもらい写真を撮つて帰った。六所宮に奉納されている農兵の射撃訓練の的を奉納されている場所は、稍薄暗い社殿の壁に掲示されていた。掲示の年代が古いから撮つた写真を現像したので少し不鮮明であるが、貴重な史料である事は間違いない。余談であるが、先の「石橋家文書」には明治二年になると、訓練を受けた農兵隊が武士達と春日原で、交戦訓練の野戦を展開したとの文書があった。結果は和銃ゆえに農兵隊が敗れたと記してあった。農兵隊には、大太鼓、小太鼓、撥、笛等を揃えて、統率と士気を鼓舞するため鼓隊も編成されたそうで、楽器の代金は、村々から上納したとの文書も残っている。東北での征討戦争が終結し、福岡の湊町に凱旋上陸した藩兵(農兵は、鼓隊隊にあわせて城内に堂々行進入場したという。洋楽を知らない当時の日本人が、どんな楽曲を演奏したのか、維新期の映画などで耳に親しい「トコナヤレ節」などであつたらうか。

寄せ太鼓

長崎街道木屋瀬宿記念館
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

豪華絢爛な雛人形 一見の価値アリ

現在みちの郷土史料館企画展示室では、「長崎街道ひなまつり 木屋瀬宿」立場茶屋銀杏屋(平成29年2月16日(木)～3月20日(月・祝))を開催しております。

昨年引き続き、石坂の立場茶屋銀杏屋(3月20日(月・祝)まで)と木屋瀬のもやいの家(3月31日(金)まで)、旧高崎家住宅(伊馬春部生家)(3月31日(金)まで)、木屋瀬宿記念館(3月20日(月・祝)まで)の4施設連携のイベントとなります。

それぞれの施設で趣を変えて、古式の雛飾りやさげもん等の展示を行っております。

もやいの家では、3月1日(水)～3月3日(金)、立場茶屋銀杏屋では、3月2日(木)～3月4日(土)で、甘酒などの振る舞いも行っておりますので、この機会にぜひお越しください。また、今年は新たに江戸あかりの民藝館で



もやいの家



木屋瀬宿記念館



旧高崎家住宅



立場茶屋銀杏屋

「雛道具、珠玉の名品展」(3月26日(日)まで)を開催しています。その他、3月4日(土)、5日(日)で「木屋瀬 お雛マルシェ2017」も開催致しますので、ぜひお越しください。

総合問い合わせ先
長崎街道
木屋瀬宿記念館
093
619-1149

平成28年度 子供恵比須頭

12月3日、4日に須賀神社にて9名の児童により平成28年度子供恵比須頭が行なわれました。この祭りは、木屋瀬に江戸時代から伝わる由緒ある行事で、旧来は、男の子が数え年11歳(現在の4年生)になりますと地域の若衆(大人)の仲間入りをする儀式として執り行われたものです。昔は、男の子もこの年頃になりすすと奉公に出たり家業の手伝いをしたりして、子供時代に別れを告げる習慣があり、いわばこの期を境に大人の仲間に入る事になります。武士社会では「元服」として祝福したそうですが、これに相当する町民方の行事だと思われまふ。

現在では、毎年12月の第一、土曜日と日曜日の2日間に渡って行なわれ笹山車を作りそれに紅白の幕を張り、頭になった子供の名前を書いて町内を練りまわります。笹山車の巡行の他には、須賀神社に伝わる社室(御幣、獅子頭など)を奉持した神幸の行列が「とまれ」とまれ旅の客」と歌いながら町内を廻ります。また、須賀神社で御座と呼ばれる神事を受け、その後、鯛のこいり、大根のこいり等定められた品々が並べられご祝儀の贈りつけます。

11月中旬から太鼓・采振りの練習を始めましたが、最初は頼りなげな子供たちが、柳勝二氏を始め青年会、地域の方々・前年頭を経験した子供たちの熱心なご指導のもと日増しに顔つきや言動が大人びていったことが印象的でした。当日は、生憎の雨に見舞われた時間もありましたが、多くの加勢人の参加を賜り、子供たちも安心して、大きな歌声を響かせて町内を練り歩き、山笠においても堂々たる姿を披露できたと思えます。一生に一度しかない木屋瀬の伝統行事を経験したことは、子供たちにとっては生涯忘れられない故郷の思い出の一つになったとともに、この先の様々な困難を乗り越える力を育んだと思います。

最後になりますが、この行事の準備から本番までご協力頂きました氏子総代会を始めとする町内の皆様方、またご芳志をくださいました皆様方に平成28年度子供恵比須頭の関係者を代表いたしまして、心より御礼を申し上げます。

世話人代表 権藤幸成



シリーズ 筑前木屋瀬宿 神仏めぐり 第三十九回 浄土真宗本願寺派 照光山 浄福寺

仏教というのは、お釈迦様の教えです。お釈迦様(釈尊)は今から二千五百年前にインドで生まれ、釈迦の王子様で二十九歳の時出家し修行をして三十五歳の時、仏陀と成られた実在の人物です。



第18世釈大心住職

浄福寺縁起によると、開基は乗雲と号し、黒崎の花尾城主麻生氏に仕えていたが、麻生氏没後出家して、廃寺であった感田村の大福寺跡を再興し、永正三年(一五〇六年)真宗本願寺派の支派に就き寺号を、浄福寺とする。又二代目浄誓は、武家出身の初代の影響を受け武芸に勝れ、織田信長の防戦に門徒と共に馳せ参戦しました。戦が終わるやその功績に本願寺より褒賞を賜ったと書かれています。本尊の阿弥陀如来像は、慶長十四年(一六〇九年)本願寺より拝領したものであり、快慶の作と称せられ文化財としても貴重な本尊です。内陣の、親鸞聖人の真向の御影も明治三十七年本願寺より授与されたものであり、又、筑前の国の黒田公より拝領の茶道具も保存しています。



さて、今回は、直方市のお寺であります。木屋瀬地域 特に笹田や野面地区に相当数の門徒が居られる、浄土真宗本願寺派の浄福寺を訪ね、第十八世釈大心住職にお話しを伺いました。浄土真宗は親鸞聖人を宗祖とする教団です。筑豊電鉄感田駅から、明治屋の前を通り越し左側の山手に瓦葺の大きなお寺が見えます。感田駅から歩いて15分位の距離です。参道の入り口に寺号が書かれた巨大な石があり、山の中腹に鐘樓を備えた二階建ての山門があり石段を登ると、境内にはこの地区では、最大規模の大型の本堂があります。筑前国統風土記によると、浄福寺は、小倉御坊(ごほう)と呼ばれた、小倉の永照寺の関連寺院と記され、12

カ寺の末寺を持つ大寺であると記されています。御坊とは、地方で本願寺の役割りを果たす出先の機関で、本願寺や幕府の通達の役目を持っていた。戦後本末制度はなくなり単一寺院となりましたが、この地区の真宗寺院としては、最も古のお寺で、その歴史の重さは本堂に深くしみ込んでいる由緒ある寺院です。

第24回 筑前木屋瀬宿まつり報告

「歴史と文化を活かした地域の活性化」を目指して始められ、24回目を迎えた「筑前木屋瀬宿まつり」は、晴天に恵まれ全てのプログラムが滞りなく執り行われましたことをご報告申し上げます。これも、長きにわたり皆さまのご支援・ご協力のお蔭であり、皆さまの「熱き心」の賜であること心から御礼申し上げます。街道では、筑前各地の「伝承盆踊り」、スタンブラリー、街並み史料館、青空市場、フリーマーケット、そして今年初参加の「のみの市」など多くの出店があり、これまでになく多くの人出で賑わい、「宿場まつり」が地域に定着した祭りになったと今さらながら感じました。こやのせ座では木屋瀬市民センターのクラブの皆さんに活動成果を発表していただき、出演したクラブやお客様からも好評であり、今後も続けてまいります。また、「宿場まつり」では各団体、町内会より100名を超す方々にスタッフとしてお世話していただきました。多くのボランティアの皆さま有難うございました。

平成28年度「筑前木屋瀬宿まつり」実行委員会 企画部会長 川崎 秀人

こやのせ NewYearコンサート2017

木屋瀬宿記念館では平成29年1月15日(日)に、響ホール室内合奏団の方をお迎えしてコンサートを行いました。わかりやすく、楽しい説明と共にドヴォルザークやエルガーなどの名曲や大河ドラマ「真田丸」のテーマ曲等、幅広いジャンルの演奏をしてくださいました。また、今回は弦楽器の他に歌(ソプラノ)が加わり、今までと違った音色で会場内を盛り上げてくださいました。来場者は約180名と大勢の方にお越しいただきました。誠にありがとうございました。



会場は熱中する子どもたちの熱気に溢れ、こやのせ座運営部会ボランティアの用意したせんざいの接待に皆さん喜んでいただけました。木屋瀬ならではの文化や歴史が織り込まれた「若井屋不彫さんの木屋瀬いろは歌留多」今ご紹介するのは「りりん」。

第16回 木屋瀬いろは歌留多大会報告

正月恒例の「木屋瀬いろは歌留多大会」も回を重ね、今年は16回目となり総勢12名の方に参加していただきました。子どもと一般の部(中学生以上)に分かれ、トーナメント方式で行いました。会場は熱中する子どもたちの熱気に溢れ、こやのせ座運営部会ボランティアの用意したせんざいの接待に皆さん喜んでいただけました。木屋瀬ならではの文化や歴史が織り込まれた「若井屋不彫さんの木屋瀬いろは歌留多」今ご紹介するのは「りりん」。

りりん すず蟲 弁戔天

- 長徳寺飛び地境内に鎮座する弁財天では、毎年、仲秋の名月の夜に弁財天講有志によって弁財天大祭が厳かに且つ盛大に執り行われています。
- 入賞者
 - 小学生の部(参加者43名 内 幼稚園生3名含む)
 - 優勝 清水 陽成(木屋瀬小学校5年生)
 - 準優勝 永末 翔(木屋瀬小学校5年生)
 - 第3位 野津 瑠彩(木屋瀬小学校3年生)
 - 第3位 藤田 美羽(木屋瀬小学校3年生)
 - 一般・中学生の部(参加者69名)
 - 優勝 宝田 美陽(木屋瀬中学校2年生)
 - 準優勝 石橋 侑大(木屋瀬中学校1年生)
 - 第3位 岩崎 愛子(木屋瀬中学校2年生)
 - 第3位 島田 大成(木屋瀬中学校1年生)



講座 “木屋瀬 時代の散歩道” 報告

平成28年9月23日(金)・10月21日(金)に行われた講座「木屋瀬 時代の散歩道」も、今回で14年目となりました。全5回の講座を開催し、木屋瀬に関するテーマを中心とした講義や、木屋瀬をはじめ唐津街道の赤間宿、青柳宿の見学を実施しました。今年の参加者は30名と多くの方が熱心に受講してくださいました。ありがとうございました。

こやのせ 宿場町木屋瀬。伝統を受け継ぎ、次世代を育む長崎街道木屋瀬宿記念館。

柴田豊廣遺稿集より



わたしの昔話

桜の花の下に大勢の人々が集まり、お弁当を開き、戦争中に簡素な生活をし、切餅を焼いて小松菜をそえ清汁にしました、これが現在もつづいているようです。お雑煮は所により祝いめでたく変わっています。自然信仰(桜の頃) 桜の花の下に大勢の人々が集まり、お弁当を開き、

お雑煮は、神さまにお供えした物を全部おろして、これをこった煮「雑煮」にしたものであります。この雑煮を再び神さまにお供えし、神さまと人が同じものをいただく事により、神さまがその家に定着されるものと信じて、家内中揃って祝うものです。京の雑煮は、菱花餅とよばれ白餅の上に、色菱餅をはりつけて、九州の雑煮のように盛り澤山な具を作り

歌つたり踊つたりのお花見をする事がありますが、人々は桜の花粉を浴び花の美しい色と香りに上気して、新しい花の生命力に包まれ、若々しい気力を授かっています。これが自然の神さまの恵みであり、自然信仰であります。こうした酒盛りを始める前に必ず側の小石か木の株

本町 柴田由美子